

思いやりのある子を育てる援助の工夫

— 共に生活する中で人とのかかわりを通して —

知念村立知念幼稚園教諭 玉 城 久 子

目 次

I 研究テーマ設定の理由	11
II 研究仮設	11
III 研究の全体構想図	12
IV 研究内容	13
1 思いやりのある子とは	13
2 教師の援助の工夫	13
3 幼児同士のかかわりで育つもの	14
V 保育実践	14
1 活動名	14
2 活動設定の理由	14
3 本時の指導計画	15
4 保育の反省と考察	17
VI 実践事例	18
1 幼児の内面を理解する	18
2 さまざまな感情体験、感動体験をする	18
3 喜びを共感していく	19
VII 研究の成果と課題	20
1 成果	20
2 課題	20

〈幼稚園教育〉

思いやりのある子を育てる援助の工夫

— 共に生活する中で人とのかかわりを通して —

知念村立知念幼稚園教諭 玉 城 久 子

I 研究テーマ設定の理由

幼児はまわりの環境や人と直接かかわることでさまざまなことに出会い、友達と共に生活する中で「喜怒哀楽」の感情体験をする。幼稚園においては遊びを通して、仲間との共同と自立の大切なことを学ぶ。ところが、幼児は自己中心的であるために、なかなか他人の立場に立つことができず、ものや友達をめぐるけんかや対立がしばしばみられる。そこで自分の思い通りにならないという経験から、自分の欲求や感情をコントロールしなければならないことに気づき、他人のいたみを知ることができるようになる。また友達とのかかわりを通して、自己と他人の存在を意識し、気持ちや考えなどを伝え合うことで相手のよさを認め、お互いを共有することができるようになる。そこで人を思いやる心が育ってくる。

しかし、核家族化や少子化の進行、生活様式の変化や価値観の多様化など、社会の変化と共に幼児を取りまく環境が大きく変化してきている。戸外で自然とふれあい思いっきり遊ぶ姿が減ってきて、子供集団の中で伝えられてきた遊びが成立しにくくなってきている。このような社会情勢が、地域社会における人間関係の希薄化を招き、同年代の子供とのふれあいの減少、遊び仲間の喪失で室内での一人遊びに追いやりられ、自発的に遊べない幼児が増えてきた。幼児の遊びの様子をみると、一人で絵本を読んだり、積み木ブロックで遊ぶなど一人でしか遊べないような活動を見つけ、それに没頭している子がいる。また、友達と遊ばないで教師と話すことを楽しみにしている子や気の合う友達同士の中では楽しそうに遊べるが、その友達がいないと遊びが見つからず一人でいることがある等、自己発揮することに弱い子もいる。

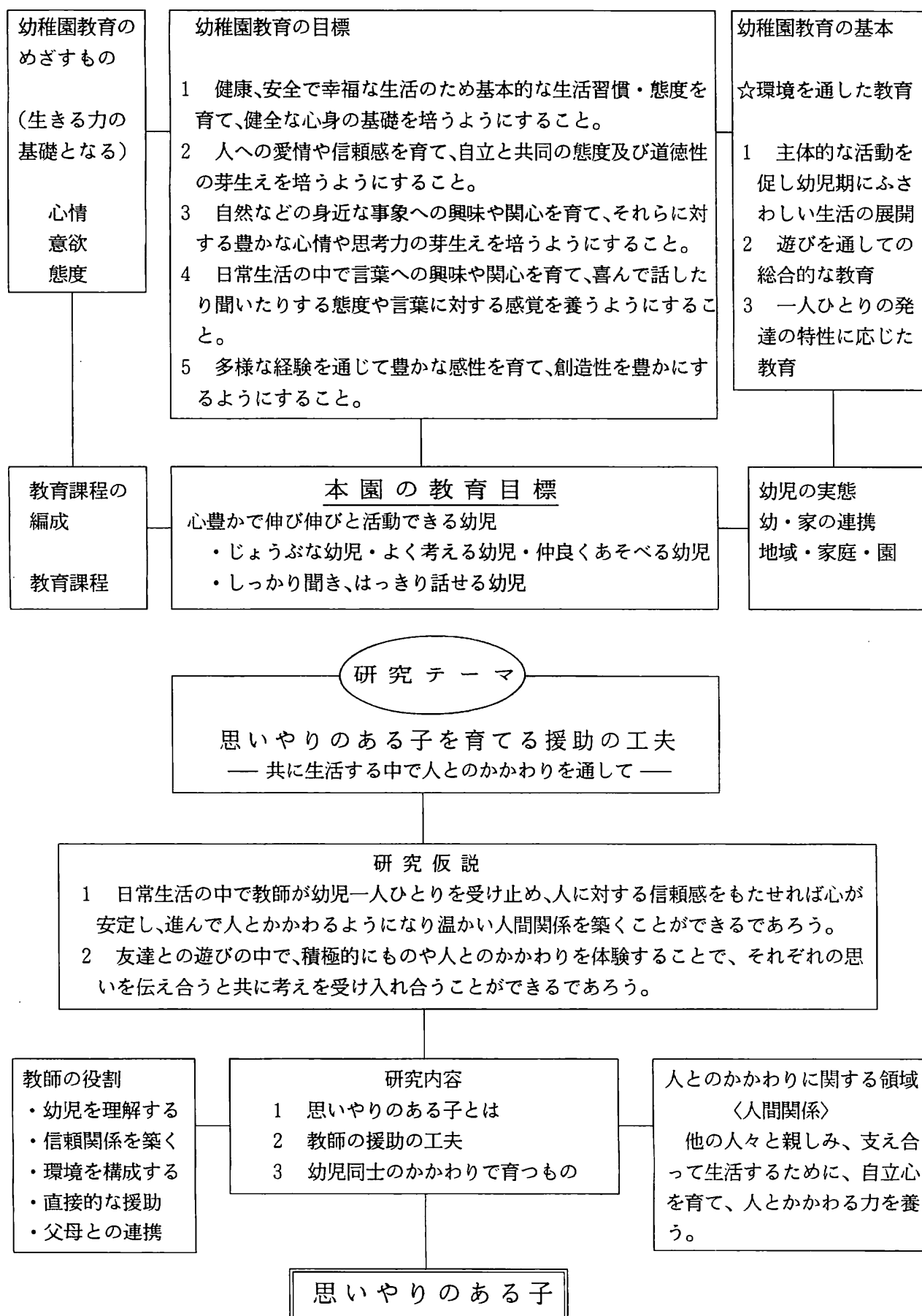
幼児が自己発揮し、友達と一緒にいるのが楽しいと感じられるようになるには、教師と幼児、幼児同士の人間関係を深めることが大切となる。教師は、幼児のつぶやきや表情、行動から幼児の内面を読み取り、幼児のさまざまな心があるがまま受け止めて、認めたり、共感したり、励ましたりなどの適切な援助を工夫しなければならない。教師と幼児の温かい心のつながりや雰囲気があると、人に対して自分から関心を持ってかかわり、自由にのびのびと活動できるようになる。また「仲間に入れて」と遊びを共にすることで相手の思いに気づき、共感したり、自己主張のぶつかりあいなどによる怒り、悲しさ、寂しさ、してはならないこと等を感じ取っていく。その積み重ねで心が通じ合い、認め合い、一緒にいることの心地よさや安心感を味わうことができる。

思いやりや共感性、心の豊かさというような心のありかたは教えて育つものではなく、かかわるという経験の中で育っていくと思われる。そのためには積極的にそのような関係を体験していくことが必要となってくる。このようなことから、日々の生活の中で人との信頼関係が育ち、自己表現ができれば、友達との相互関係が深められ、互いに影響し合いながら成長していくと思われる。そこで、友達をいたわる気持ちやおもいやりの心が持てるようになると考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

- 1 日常生活の中で教師が幼児一人ひとりを受け止め、人に対する信頼感をもたせれば心が安定し、進んで人とかかわるようになり温かい人間関係を築くことができるであろう。
- 2 友達との遊びの中で、積極的にものや人とのかかわりを体験することで、それぞれの思いを伝え合うと共に考えを受け入れ合うことができるであろう。

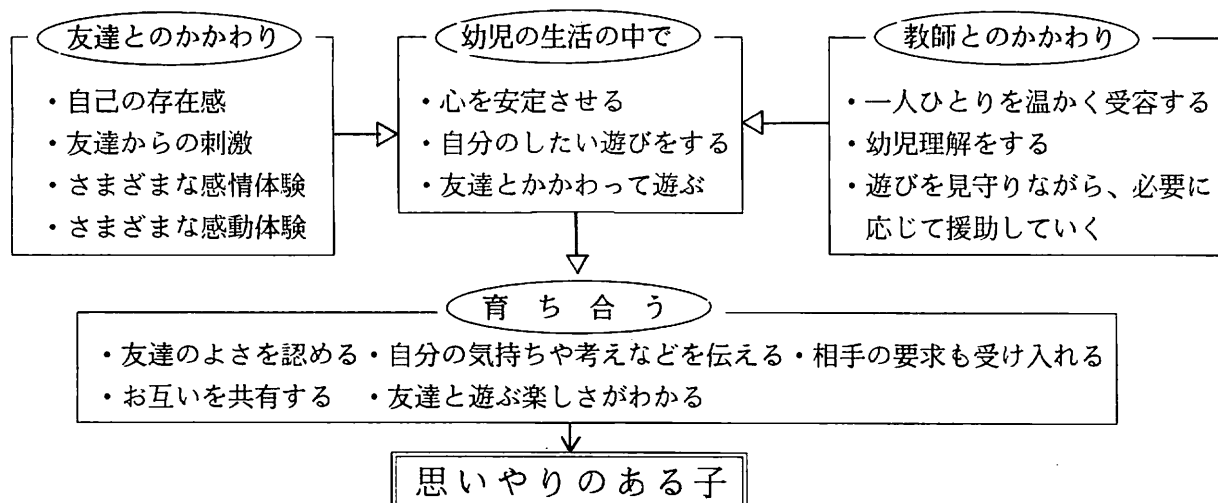
Ⅲ 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 思いやりのある子とは

思いやりとは、他者の様々な気持ちに気づき、感じとり、その気持ちをお互いにやりとりすることで相手の立場に立って、相手の気持ちを汲むことと捉える。幼稚園においては、さまざまな活動を通して人とのかかわるという経験の中で育っていくと考え、以下のようにまとめた。



2 教師の援助の工夫

幼児期は大人への依存を基盤として、自立に向かう時期である。そこで幼稚園生活においては、教師との信頼関係を築くことが一番大切となる。教師が側にいるときに、幼児が愛されていると感じ、気持ちが落ち着いてくる。また、教師のほうでも幼児との生活に安らぎを感じる。そういう人間関係をもつことが前提となる。幼児の表情、身ぶり、行動、言葉から幼児の内面を読み取り、幼児のさまざまな心（嬉しい喜び、悲しみ、葛藤、挫折、まよい、やる気、苦しみ等）をあるがままに受け止めて、認めたり、共感したり、励ましたりなど教師の適切な援助で、信頼関係は築かれ人とのかかわる力が育つ。そこで、幼児と教師の関係から、幼児の育ちを次のようにまとめた。

教 師 の 援 助	幼 児 の 育 ち
(1)あるがままを受け止める ・幼児を見続け、気持ちに寄り添う。 ・安心して自分らしさを出すことができるよう、幼児なりの表現方法をしっかりと受け止める。 ・遊びの場を用意したり、言葉をかけたり等、具体的なかわり方で受け止めていく。	・安心して自分をだす。 ・教師と自分との一対一の関係を感じながら、信頼関係が育つ。 ・自分の行動に満足感を味わい、意欲を持つ。
(2)幼児の側から見たり考えたりして、気持ちや遊びに共感的にかかわる。 ・幼児の姿、状況を理解するようにする。 ・幼児の行動に期待を持って見守ったり、幼児なりの判断に共感する。 ・幼児と共に行動しながら、その時の気持ちに共感する。	・安定感や自信を持って生活する。 ・自分の思いが表現できる。 ・いろいろな人やものに信頼感を持ち興味関心を広げる。

(3)一人ひとりの内面を理解し、応答的にかかわっていく。 ・要求に応じ、楽しさや自信につながる手助けをする。 ・一人ひとりのよさを認める。 ・一人ひとりの思いや心の動きを捉えて、それに応答する。 ・自分で試したり、選んだりできる場や時間、雰囲気を作る ・必要に応じて教師からの誘いかけや提案など援助をする。	・失敗を恐れずに、挑戦したり試したりする。 ・自分のイメージを広げ、遊びを進めようとする。 ・実現できた喜びを味わったり、自信を持ったりする。
(4)教師の思いを伝え、互いが思いを出し合う。 ・幼児が思いを出しやすい雰囲気作りにつとめる。 ・一人ひとりの子供の発達課題や育ちへの願いを持つ。 ・援助の結果を振り返り、幼児の変容を捉えておく。 ・教師自身の振り返りをする。	・自分の思いが出せる。 ・自分の見方や考え方を変えたり、広げたりする。 ・自分の思いを出したり、相手の思いを受け入れたりする。 ・人への信頼感を深める。

3 幼児同士のかかわりで育つもの

(1) 生活全体の中での友達とのふれあい

一緒に生活したり遊んだりするきっかけは、一緒に遊ぶことが楽しいかどうか、遊びのペースがあるかどうかの基本となる。何をするのもいつも一緒という仲良しの友達もいれば、遊びの種類や内容によって変わる友達もいる。その生活の積み重ねの中で影響しあい、認め合ったり、励まし合ったりすることで、喜びと自信が育つ。

(2) 豊かな感情体験と感動体験

さまざまな体験の中で、一緒に遊べる楽しさ、仲間に入れない悲しさ、けんかと憎しみや敵意、ゲームと勝ち負け、競争心、いたわり、親切、感謝等の感情体験を通して対人的感情が豊かになっていく。また、心を動かされる美しさ、不思議さ、偉大さなどを全身で感じとる体験を持つことを大切に、教師や友達と共有し、伝え合うことが十分に行われるようにすることが必要である。

(3) 自分の感情や意志の豊かな表現

遊びの仲間にも自分も入れてほしいとき「入れて！」と言い、他の子が使っているものを使いたくなったとき「かして」と言えるかが大切なことである。そのとき「うん」と応えるか「いや」と応えるか、相互交渉が始まり、それが受け入れられたとき「うれしい」とか「ありがとう」などの言葉での表現が大切となる。感じていること、考えていること、相手に伝えたい自分の要求などを、できるだけ素直に表現することは基本的に大事なことである。しかし、相手の心を傷つける表現は、していけないことと、気づかせなければならない。それは、自分にとってふれられたくないこと、話題にしてほしくないことが話題にされたときのつらさの経験とか、そっとしておいてほしかったときにそっとしておいてくれたり、かばってくれたときのうれしさなどの体験を通して育っていくものである。

V 保育実践

1 活動名 ペープサートを作って遊ぼう

2 活動設定の理由

(1) 幼児観

運動会の行事を経験したことから、友達との結びつきもいっそう深まり、友達関係も安定してきている。気の合う友達同士では、考えたことや感じた事などを思いのままに言葉で表現できるようになり、イメージを共通にして遊ぶようになってきている。遊びにおいては、仲間を集めてゲームをしたり、遊び方を考えてみたり、遊びのルールを決めたりするなど工夫がみられる。

ペープサートや指人形をつかって思い思いに話したり役割にあった言葉のやりとりなどがみられる。グループの中で友達の模倣をしたり、自己発揮しながら遊びを楽しんでおり、ペープサート遊びでは絵本のストーリーで話を進めている。誰かに見てほしい気持ちで椅子を並べたりしているが観客になる子は少ない。また観客が集まってくると、声が小さくなり聞こえにくい。

描画・製作において、人の絵は伸び伸びとかいているが動物の絵は描くのに時間がかかる。女の子は特徴のはっきりしているうさぎ・いぬ・くま……等を描くことができるが、男の子はイメージを膨らませるのがむづかしい。2～3人の子は手ほどきが必要である。ハサミやテープは使いなれている。

(2) 教材観

ペープサートは描いた絵をくりぬき、支え棒を張り付けた人形である。左右に動かし言葉のかけあいで、相手にあわした話をする事や役割分担したせりふが言え劇ごっこをすることができる。作り方、操作ともに手軽で容易にできるが、人形の動作や表現が単純になりやすい。効果的な操作方法として静・動の動きにけじめをつけること。会話をするとき、歩くとき、裏返すときの動作をはっきりさせることが大切である。今までの生活経験や遊びからの会話で相談しあって物語を作してほしい。

一人で遊ぶよりも友達がいることで楽しさはさらに増してくる。友達のよい点を模倣し、刺激しあい活動が活発になる。相手の考えを受け入れ、自分の思いを相手に合わせ、話を作っていく喜びで自らを成長させてほしい。

(3) 保育観

「おもしろそうだな」という好奇心に「じぶんもやってみたい」と心動かされ、遊びに取り組んでみる。遊びのイメージに合わせ、周りにあるものの中から必要なものを選んで使ったり、場を構成したりして遊びを進めていくことができる。自分のイメージするものが描けない子には、ヒントとして絵本や図鑑をみて動物の特徴をとらえて描いていけるようにする。また取り組みの遅い子には、何の動物が好きか、声かけをして動物のイメージを膨らませ一緒に作ることで仕上げる喜びを共に味わう。

できあがった子は舞台上、コーナーで、何人か集まり身近に起こったできごとや体験を話す中で相手との会話を続けながら自分の考えをだしたり、友達の考えを受け入れたりして遊びの場を作り出す満足感を味わってほしい。イメージがまとまらなかったり、会話がつまったりしたら教師も遊びの中に入り、言葉を投げかけたりして次へのイメージをふくらませていく。幼児の発想を大切にし、それぞれのおもしろさを伝え、自信を持って活動できるようにしたい。

写真① ペープサートを作って遊ぶ

3 本時の指導計画

(1) 活動のねらい

- ① 遊びのイメージに合わせ、周りにあるものの中から必要なものを選んで、遊びに使うものを作ったり、場を構成して遊びを進めていく。
(写真①)
- ② 友達の考えを受け入れたり、自分の考えを出したりして遊ぶ。



(2) 活動内容

- ① 小動物の絵をかき、ペープサートをつくる。
- ② 自分の思いを言葉で表現して遊ぶ。

(3) 保育の仮説

ペープサートを通して、友達の考えやアイデアを取り入れたり自分の思いを出したりして、イメー

ジを膨らませていけば、遊びが楽しくなり友達とのかかわりも深まっていくことだろう。

(4) 展開

時 間	幼 児 の 活 動	教 師 の 援 助
8 : 15	登園 ・朝のあいさつ ・所持品の始末 ・動植物の世話をする	・明るくあいさつを交わし、健康観察をする。
8 : 30	好きな活動をする ● 積み木を使って 友達と戸外で体を動かして遊ぶことを楽しむ ◎ サッカー野 球をする ★ なわとび ・大波小波 ・郵便屋さん ▲ あやとり 友達の中で自分を表現して遊ぶ ♪ リズムで楽しく 音楽隊 ダンス ▽ 劇場ごっこ ノントン劇場	※一人ひとりの幼児が遊びの中から心を動かし「ともだちっていいな」と感じる環境を設定する。 ●遊びの中でのトラブルもできるだけ自分たちで解決できるように見守る。 ★縄の持ち手になったり交替し合ったり、跳ぶ回数を数えてあげたりする。 ◎友達同士でルールを確認したり、同じチームの友達を応援したりしている姿を認め、仲間意識が高まるようにする。 ▲あやとりの図を見たり友達と教え合う姿を見守る。 ♪▽ より落ち着いたコーナーになるよう手助けをしたり、他の遊びの場との兼ね合いを考えさせたりする。 ▽楽しさを味わうチャンスとして見守り、時には観客になって刺激を送ったりしながら、遊びが充実していくように援助する。
9 : 00	◆ <u>ペープサートを作って遊ぼう</u> クラスに集まる ・ノントン劇場で遊んでいた子を紹介する。 「ノントンボールまてまて」を演じる。 3～4人 ◆おはなし作り 「〇〇〇くんのおさんぽ」 ◆なりたい役や登場させたい小動物のペープサートを作ろう。 厚紙・画用紙・マーカー 割り箸・テープ・絵本	・自分たちで作ったお話で進められたことを認めてみんなに紹介する。(自信) ・観客になってみることで自分も演じてみたい気持ちをもたせる。(意欲) ・台紙を使ってイメージを膨らませ、幼児の会話で物語をつくっていく。 ・「ペープサート人形があったらいいね」と声をかけることで「作りたい」気持ちを高めていく。 ・数ある材料の中から選んで使えるようにする。 ・描きたいけどなかなか絵がかけない子にヒント

10 : 00	・絵を描く ・色を塗る ・余白を残して切る ・棒を絵の裏にはりつける。 ◆仕上げた子は片付けをする。 ・切り残しの紙を手で拾う。 ・自分の用具を片づける。 (はさみ・マーカー) ◆作ったペープサートをもって集まる ◆歌「どうぶつ村の広場」をうたう。	になるよう絵本を準備することで描こうとする意欲をもたせる。 ・取り組みの遅い子には何の動物が好きか声かけをし、一緒にやるようにする。 ・棒をつける位置（持ち手）を考えさせ、仕上げる喜びを共に味わう。 ・一人ひとりの表現を認め、励ます。 ・使った用具を元の位置に戻し、遊びの場を作る ・早くしあげた子はペープサートを通して、友達に話しかけたりして遊びが楽しめるように方向付けをする。 ・何人か集まり、それぞれの動物とのかけあいの言葉を楽しむ。 ・今日遊べなかった子は「明日つづきをしようね」 「上手になっておうちの人にみてもらおうね」と明日につなぐ。 ・いつでも使えるようにペープサートを自分の道具箱に入れる。
視 点	・友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。	評 価 ・友達の考えを受け入れたり、自分の考えをだしたりして遊ぶことができたか。

4 保育の反省と考察

- (1) 身体を動かして遊ぶ＜積み木コーナー＞では、子ども達のアイディアで積み木を組み合わせいろいろなコースが作られていた。子ども達は、自分の力にあったコースにチャレンジして楽しんでいたが遊び込んでいくうちに、ジャンケンをしたり、なぞなぞをする等の関所をつくり遊びの流れを変えていった。交差する場所では「お先にどうぞ」とゆずったり、難所では「みておけよ」と手本を示したり、「おしりからすべったら大丈夫だよ」と声かけあう姿がみられたことから、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができたと思われる。幼児のやりとりをみていると、自分の気持ちや考えなどを相手に伝え合い遊びを共有していることから、人とのかかわる力が育ってきていると捉える。
- (2) ペープサート作りでは、イメージを膨らませることができ、自分の思いで作り始めていた。棒の長さを工夫したり、材料を選んで作ったり教え合ったりして成就感を味わうことができた。2～3人の男の子は、テレビのイメージ（ピカチュウ）から脱しきれず、描きだすのに時間がかかったが絵本を見たり、一人ひとりに合った援助をすることでイメージを明確にすることができた。描けないときは、友達や先生に聞いたり、描いてもらったりしているうちに自分の納得するものを作ることができた。仕上げた満足感で遊びはじめ、友達とかかわることで役になりきって遊ぶことができた。
- (3) 抽出児Yくんは、見たり聞いたりすることは真剣で活発だが、静的活動が苦手なのでじっくりかかわることで心が安定し、描く意欲につながったと思われる。またKくんは、友達の考えを受け入れながら自分のものを確立することができ成就感・満足感を味わうことができたと思われる。
- (4) 各々が自分の作品をみせあい、良さを認め合うことで充実感・満足感を味わい自信となり、遊びも活発になった。これからも子供たちの発想を大事にし、遊びが続けていけるようアドバイスをして見守っていききたい。

VI 実践事例

1 幼児の内面を理解する (幼児と教師とのかかわりから)

(1) 「ひとりでできるよ」

教師のかかわり

・くつやカバンなどの始末ができるかな？入園当初から親子とも不安でいっぱいだったK子さん。「YさんとN子さん、ふたりだけで遊んでいるよ」「○○かしてくれない」「ぶらんこのりたいのに……と一緒に遊べない不満はつのるばかり。自分の居場所が見つけられずにいる。

「先生と一緒にあそぼう」と絵本を読んだり、折り紙をしたり、固定遊具で遊んだりする。
(あるがままを受け止める)

「先生と遊びたい」の思いで集まってきた幼児達とかかわりがもてるようになり、遊びの中に入れるようになってきた。

・雨がふりつづき、毎朝カッパの始末にせわしい幼児達。Kさんは始末ができず、入室できない。カッパのボタンがはずせないようだ。しばらく様子を見ているが、できそうにないので手伝ってあげる。何日もそのような状態が続く。帰るときは、さらに時間がかかる。Rさんが手伝っている。

とうとう傘をさして登園する。(2～3日)

体が小さいから、傘よりカッパが安全なことを話し合い「先生と一緒にがんばろうね」と約束する。
(励まし)

翌日、しかたなくカッパをつけてきた。母親からのメモを渡す。

ボタンのかけしめがむづかしく、
カッパをいやがります。手伝って
下さいネ。

「K子の気持ちをしっかりと受け止めてなかったんだな」と反省し、「先生とがんばろうね」と誓い合う。
(内面理解の難しさ)

雨降りの日、カッパをつけてきたK子さんに近づいていくと「もう、一人でできるよ」とニコニコ顔。よかったね。

(2) 考察

・幼児の甘えたり、頼る気持ちを受け止めることの難しさを感じた。幼児の育ちを見通しての教師の思いが強く、いま幼児が求めていることの内面理解が十分でなかった。でも困っている子に対して、Kさんが手伝っている姿をみると、先生に手伝ってもらった心地よさを感じたことで相手の気持ちに気づき、手伝ってあげるといふかかわりができたと思われる。受け入れられたときの「うれしさ」が他の人の気持ちによりそうことができたのではないかと考える。

2 さまざまな感情体験、感動体験をする (幼児と幼児のかかわりから)

(1) 砂場遊びにおいて

Y男を中心に砂場で穴を掘っている。R男、M男、K男は雨どいを持ってきてY男の穴につなげている。R男が水を運んできて雨どいから流すと川のように流れる。それをみていたM男、K男は、どんどん水を運び、流して水たまりを作って喜んでいる。

Y男「わあーい、ダムができたぞ」

R男「あれー、すぐに水がなくなるよ」

Y男「もっと流せばいいさ」「はやくーM男、K男水もってこーい」

M男K男「はーい」

4人でダム作りに夢中である。水を流しながら、花びらや木の葉を流し楽しんでいるM男K男。水を

流してもなかなかたまらない。R男が、クワディサーの葉っぱを流したら、葉っぱの上に水がたまり始めた。Y男すぐに気づき、クワディサーの葉で囲ってダムを作った。さらに葉で道を作り、ダムを広げていく。

Y男「水もっともってこおーい」

M男「おればっかりか」

水運びで遊びに参加していたが、疲れてきた頃から役割交替を訴えるが、聞き入れてくれず不満をぶつける。「わかった、わかった」と言うが、交替しようとしないう男。M男が水運びをやめたことで気づき、Y男自ら水運びをする。水くみ役、雨どいを持つ役を交代することでそれぞれの役での遊びを楽しんでいる。

(2) 跳び箱遊びにおいて

T・教師のかかわり

4段、5段と跳び越していくY男。「Y男すごいなー」周りにいた幼児達は、感心しながら、「Y男みたいにとべたらなー」という思いで跳び箱にチャレンジしている。みんな並んで跳んでいるのに、Y男は割り込みをしたり、跳び箱の前に立ちふさがったりしている。

T男「自分ばかり跳んでかー」

S男「Y男くん、どけよ、とべないだろ」

A子「いばってるー」

まわりの子に言われるが、Y男ふざけている。

「もういいよ、Y男と遊ばんからな」「おもしろくない」と遊びをやめていく幼児達。一人ぼっちになったY男。教師の顔を見ながら、ふてくされる。

T「どんな気持ち？」

Y男「……」

T「ほんとはみんなと遊びたいんだよね。Y男も、とびたいのにじゃまされたらどんな？」

Y男「おもしろくない」

T「みんなと遊ぶにはどうしたらいいかな？」

(3) 考察

・仲間とのやりとりで、自己を強く主張することの多いY男である。でも、自分の考えやアイディアを次々と遊びの中で実現していくY男の存在は、まわりの幼児達にとって大きな魅力である。でも友達のよさを認めながらも自分の気持ちを伝えることができる周りの子の育ちとかかわりで、相手の気持ちに気づくことができたY男。友達とかかわったり、ぶつかり合ったりする場面を捉え、相手の思いや気持ちを受け入れることの大切さを指導していった。まだまだ、強く言うこともあるが「ごめん、ごめん」と素直に言って自分で気持ちの切り換えをするようになってきたことは、友達を受け止め、認め合う力が育ってきていると捉える。

3 喜びを共感していく <父母との連携を通して>

(1) 「しゅりけんつくれるよ」

□□ 父母から

□□ 教師のかかわり

2枚の色紙を使って、しゅりけん作りをしているところへY君もやってきて、われ先に「作って！」とかけてくる。「ここまでは自分で作れるかな」と折り方を教えると、まわりの子が「ロケット型ができたら合体して出来上がりだよ！先生。」と確認をする。

Y君いつもだと自分が一番と、割り込みしがちだがまわりの雰囲気、ロケット型まで作ろうとがんばっている。なかなかできずにいると、T男が手伝ってくれた。「ねえ、できたできた。早くしゅりけんにして！」とせがむ。「みんな順番だよ、まってね」と言うと、気はあせりながらも並んで待っている。やっと自分の番になると、真剣な顔で手元をみつめている。「わあーい、しゅりけんだ。もっと

作ってよ。」とさらに色紙をとってきて順番をまっている。翌日、母親からメモが届く。

しゅりけんが作れたとみせてくれました。あんなにイヤがっていた折り紙だったのに。

「小さい頃から、じっとするのが苦手で、誰かにやってもらって満足するというのが常であった」と家庭訪問で聞いて、「どんな小さなことでも、自分で仕上げたとき誉めてあげること、また、その子のがんばりをぜひ知らせてほしい」と話し合っていたので、メモがよく届いた。

今日もしゅりけんをもって帰りました。作り方を覚えたようで家族みんなの分つくっています。

自分で作る喜び、仕上げる満足感を味わうことができたのでしょうか。

(2) 考察

- ・ 幼児が求めるものすべてに応じるということではなく、幼児の育ちや思いにそった援助、幼児の力を信じ見守ること、遊びや生活の中で必要な技能、態度を身につけていくための援助のあり方は、教師も一緒に遊ぶなかで適切に行われなければならない。T男に教えてもらったことで、仕上げる喜びとくり返しやるうちに自分でもやればできるという成就感を味わうことができたY男。その喜びを両親が受け止め認めたことからさらにやる気がもてた。このことから父母との連携で信頼関係を築き、幼児の育ちにあった共通理解がもっとも大切であることがわかった。

VI 研究の成果と課題

1 成 果

- ・ 幼児の姿を捉えるとき、幼児のつぶやきや表情、行動や内面の動きに気づくことの大切さ、また全面的に受け入れることで幼児との信頼関係がもてることがわかった。
- ・ できるだけ自分の力でやろうとする意欲を育て、それぞれの幼児の発達にあった適切な受容、励ましなどによって、自分でやり遂げることの満足感を十分に味わわせることが必要である。
- ・ 幼児は、教師に受け入れられることで安心して自分をだし、自信を持って生活する。そして、いろいろな人に信頼感を持ち、興味関心を広げる。教師は目に見える行動や遊びにつきあうのではなく、共に行動しながらその時の幼児の気持ちに共感することが大事であることを痛感した。
- ・ 幼児は、友達と遊ぶ中でトラブルや主張・考えの違いなど様々な葛藤体験をし、そこで、自己の感情コントロールや相手の気持ちを受け入れることを学んでいくということがわかった。

2 課 題

- ・ 一人ひとりの幼児が心地よい体験を持ち、一緒に生活する喜びを感じあえる場作りに努めたい。
- ・ 幼児の内面を読みとる力量を高め、必要なときに適切な援助ができる教師でありたい。
- ・ 父母との連携を密にし、幼児の育つ姿と育ちに必要なことを共通理解することで、よりよい保育が進めていけるようにしたい。

《主な参考文献》

文部省	『幼稚園教育指導書 増補版』	フレーベル館	1989年
大場牧夫編著	『人間関係（人とかかわりに関する領域）』	ひかりのくに	1991年
岩井勇雄	『指導法の研究』	チャイルド社	1991年
井上日出雄	『ひびきあう人間関係を育てる保育』	大津市教育研究所	1997年